

ヤマネとヒメネズミの休眠場所の樹高について
Tree heights of rest sites used by Japanese dormouse
(*Glirulus japonicus*) and small Japanese field mouse (*Apodemus*
***argenteus*)**

○門脇正史・杉山昌典(筑波大・農林技術センター八ヶ岳演習林)

1. 背景と目的

樹上性小型哺乳類のヤマネは、日中、樹洞等で休眠する。このような性質を利用して樹木に架設した巣箱で日中に休眠しているヤマネを調査するのが定番である。巣箱は、観察が容易にできるように胸の高さ(1.2~1.5m程度)に架設するのが通例である。ところが、1本の樹木に1.5m、3m、4.5mと高さを違えて巣箱を架設した場合、地上4.5mに架設した巣箱が最も多く利用されていた(中村他、2013)。同様に、0.5m、1.5m、6mの高さで樹幹に架設した巣箱内の巣材が最も多かったのは6mであり、その高さの巣箱利用が多いことが示唆される(杉山・門脇、2013)。また、電波発信機によるヤマネの日中の休眠場所の調査からもヤマネは2m以上の樹上の利用が多いことが知られる(玉木他、2012)。どの樹高に架設した巣箱の利用が多いかを明らかにすることは、ヤマネの垂直的空間利用を知る上でも重要であり、ヤマネの生息に適した林分構造をもつ森林管理を目指す際の基礎資料にもなり得る。

本研究では架設高の違う巣箱利用の調査により、ヤマネの森林における垂直的空間利用を明らかにすることを目的とする。さらに、もう1種の樹上性小型哺乳類であり、体サイズ、餌、休眠・営巣場所がヤマネと類似したヒメネズミの垂直的空間利用についても報告する。

2. 方法

2012年に長野県にあるカラマツ等の人工林が70%を占める筑波大学農林技術センター川上演習林(約190ha)において、林道沿いの樹幹にそれぞれ0.5m、1.5m、6mの高さに巣箱を架設した樹木(n=31)と1.5mの高さのみに巣箱を架設した樹木(n=36)をほぼ交互に配置した(杉山・門脇、2013)。調査は2013年7~9月に月に2~3回、10月は1回(10月25日現在)、各巣箱を点検してヤマネやヒメネズミ等の利用動物の種を記録し、搬入されている巣材はそのままにした。

3 結果と考察

0.5m、1.5m、6mの高さにそれぞれ架設した樹木の巣箱(以下、3段巣箱と称する)と1.5mの高さのみに架設した樹木の巣箱(以下、単独巣箱と称する)のヤマネの利用はそれぞれ延べ21個、4個であった。3段巣箱の利用が圧倒的に多いが、同じ樹木に架設していた高さの違う巣箱を同時に利用することはなく、いずれかの高さの巣箱のみを利用していた。ヒメネズミでも、3段巣箱の延べ利用数6に対して単独巣箱は3であった。こちらも同じ樹木の高さの違う巣箱を同時に利用した例はなかった。

次に3段巣箱における高さを比較すると、ヤマネは6mの巣箱を延べ20個利用数したのに対して、1.5mは1個、0.5mは全く利用しなかった。ヒメネズミは6mを4個、1.5mを2個利用したが、0.5mはヤマネ同様全く利用しなかった。

これらのことから、ヤマネは6m以上の垂直的空間が日中の休眠場所として重要だと考えられる。ヒメネズミも高所を利用する傾向にあるが、利用状況を考慮するとヤマネほど高所は重要ではないかもしれない。ヤマネとヒメネズミの垂直的空間利用についてはさらに調査を進める予定である。